

西瓜

永井荷風

青空文庫

持てあます西瓜すいかひとつやひとり者

これはわたくしの駄句である。郊外に隠棲している友人が或年の夏小包郵便に托して大きな西瓜を一個ひとつおく饋つてくれたことがあった。その仕末しまつにこまつて、わたくしはこれを眺めながら覚ええずずさんだのである。

わたくしは子供のころ、西瓜や真桑瓜まくわうりのたぐいを食くらうことを堅く禁じられていたので、大方そのせいでもあるか、成人の後に至つても瓜の匂を好まないため、漬物にしても白瓜しろうりはたべるが、胡瓜きゅうりは口にしない。西瓜は奈良漬ならづけにした鶏卵たまごくらいの大ささのもの味うばかりである。奈良漬にすると瓜特有の青くさい匂が

なくなるからである。

明治十二、三年のころ、コレラびよう虎列拉病が兩三度にわたって東京の町のすみずみまで蔓延まんえんしたことがあった。路頭に斃たおれ死するものの少くなかった話を聞いた事がある。しかしわたくしが西瓜や真桑瓜を食うことを禁じられていたのは、恐るべき伝染病のためばかりではない。わたくしの家では瓜類うちの中で、かの二種を下賤な食物としてこれを禁じていたのである。魚類では鯖さば、青刀魚さんまいわし、鰯いわしの如き青ざかな、菓子このたぐいでは殊とに心ところてん太とを嫌つて子供には食べさせなかつた。

思返すと五十年むかしの話である。むかし目に見馴れただえんけ楢円だえんけ形の黄いいろい真桑瓜は、今日こんにちではいずこの水菓子屋にも殆ど

見られないものとなつた。黄いろい皮の面おもてに薄緑の筋が六、七本
ついているその形は、浮世絵師の描いた狂歌の摺物すりものにその痕あとを
留とどめるばかり。西瓜もそのころには暗碧あんぺきの皮の黒びかりしたま
ん円まるなもののみで、西洋種の細長いものはあまり見かけなかつた。
これは余談である。わたくしは折角西瓜を人から饋おくられて、何
故こまつたかを語るべきはずであつたのだ。わたくしが口にする
ことを好まなければ、下女に与えてもよいはずである。然るにわ
たくしの家には、折々下女さえいない時がある。下女がいなけれ
ば、隣家へ饋ればよいという人があるかも知れぬが、下女さえさ
びしさに堪たえ兼ねて逃去るような家では、近隣とは交際がない。畜ただ
にそれのみではない。わたくしは人の趣味と嗜性しせいとの如何を問わ

ず^{みだり}濫に物を饋ることを心なきわざだと考えている。

○

わたくしはこれまでたびたび、どういうわけで妻帯をしないのかと問われた。わたくしは生涯独身でくらそうと決心したのでもなく、そうかといって、人を煩^{わづらわ}してまで配偶者を探す気にもならなかつた。来るものがあつたら拒^{こぼ}むまいと思ひながら年を送る中^{うち}、いつか四十を過ぎ、五十の坂を越して忽ち六十も目^{もくしやう} 睫^{かん}の間に迫^{ごうきん}つてくるようになった。世には六十を越してから合^{ごうきん}の式を挙げる人もままあると聞いているから、わたくしの将来について

は、わたくし自身にも明言することはできない。

しずかに過去を顧るに、わたくしは独身の生活を悲しんでいなかった。それと共に男女同棲の生活をも決して嫌っていたのではない。今日になってこれを憶えば、そのいずれにも懐しい記憶が残っている。わたくしはそのいずれを思返しても決して慚愧と悔恨いこんとを感ずるようなことはない。さびしいのも好かつたし、賑にぎやかなのもまたわるくはなかった。涙の夜も忘れがたく、笑の日もまた忘れがたいのである。

大久保に住んでいたころである。その頃家うちにいたお房という女とつれ立って、四谷通よつやどおりへ買物に出かける。市ヶ谷まんじゆうだに饅頭谷の貧しい町を通ると、三月の節句に近いところで、幾軒となく立ちつ

づく古道具屋の店先には、雛人形が並べてあつたのを、お房が見てわたくしの袂たもとを引いた。ほしければ買ってやろうというとお房はもう娘ではあるまいし、ほしくはないと言つたので、そのまま歩み過ぎ、おもてどおり表あした通の八百屋で明日たべるものを買い、二人でかわ交る交る坊主ぼうずもち持をして家にかへつたことがある。何故なにゆえとも分らず、この晩の事が別れた後まで永くわたくしの心に残つていた。

冬の夜はしんしんとふけ渡つて、窓の外には庭の樹きを動すゆるやかな風の音が聞えるばかり。犬の声もせず鼠の音もしない。ふすま襖のあく音に、わたくしは筆を手にしたままその方を見ると、その頃家うちにいた八重という女が茶と菓子とを好みの器うつわに入れて持ち運んで来たのである。何やかやとはなしをしている中に、鐘の音が

聞える。遠い目白台の鐘である。わたくしはその辺にちらかした古本を片付ける。八重は夜具を敷く前、塵を掃出すために縁側えんがわの雨戸を一枚あけると、皎々こうこうと照りわたる月の光に、樹の影が障子しょうじへうつる。八重はあしたの晩、哥沢節うたざわぶしのさらいに、二上にあげりの『月夜鳥つきよがらす』でも唱うたおうかという時、植込の方で烏らしい鳥の声がしたので、二人は思わず顔を見合せて笑った。その時分にはダンスはまだ流行していなかったのだ。

麻布いおりに廬いりを結びす独り棲むようになってからの事である。深夜ふと眼をさますと、枕元の硝子窓ガラスまどに幽暗な光がさしているので、夜があけたのかと思つて、よくよく見定めると、宵の中には寒月が照渡っていたのに、いつの間にか降出した雪が庭の樹と隣の家

の屋根とに積っていたのである。再び瓦斯ストーブに火をつけ、読み残した枕頭の書を取つてよみつづけると、興趣の加わるに従つて、燈火は熒々として更にあかるくなつたように思われ、柔に身を包む毛布はいよいよ暖に、そして降る雪のさらさらと音する響は静な夜を一層静にする。やがて夜も明け放れてから知らず知らずまた眠に堕ち、サイレンの声を聞いて初て起き出る。このような気儘な一夜を送ることのできるのも、家の中に気がねをしたり、または遠慮をしなければならぬ者のいないがためである。妻子や門生のいないがためである。

午後三時過ぎから、ふらりと郊外へ散歩に出る。行先さだめず歩みつづけて、いつか名も知らず方角もわからぬ町のはず

れや、寂しい川のほとりで日が暮れる。遠くにちらつく燈火を目
 当に夜道を歩み、空腹に堪えかねて、見あたり次第、酒売る家に
 入り、怪しげな飯めしもり盛の女に給仕をさせて夕飯を食くう。電燈の薄
 暗さ。出で入はいりする客の野趣を帯びた様子などに、どうやら『膝栗
 毛』の世界に這はい入ったような、いかにも現代らしくない心持にな
 る。これもわが家に妻孥さいどなく、夕飯の膳に人の帰るのを待つもの
 のいないがためである。



そもそもわたくしは索居独棲さくきよどくせいの言いがたき詩味なへんを那辺より

学び来^{きた}つたのであろう。わたくしはこれを十九世紀の西洋文学から学び得たようにも思い、また江戸時代の詩文より味い来つたもののような気もする。わたくしはたとえ西洋の都市に青春の幾年かを送つた経歴がなかつたとしても、わたくしの生涯はやはり今日あるが如きものとなつてしまふより外には、道がなかつたように思われる。わたくしの健康、性癖、境遇、それらのものを思返して見ると、わたくしの身は世間一般の人のように、善良なる家庭の父となり得られるはずはないようである。

多病の親から多病ならざる子孫の生れいづる事はまず稀である。病患は人生最大の不幸であるとすれば、この不幸はその起らざる以前に防止せねばならない。わたくしは自ら制しがたい獣慾

と情緒とのために、幾度いくたびとなく婦女と同棲したことがあったが、避妊の法を実行する事については寸毫すんごうも怠る所がなかった。

わが亡友の中に帚葉山そうようざんじん人と号する畸人きじんがあつた。帚葉山人はわざわざわたくしのために、わたくしが頼みもせぬのに、その心やすい名医何なにがし某博士とを訪い、今日普通に行われている避妊の方法につき、その実行が間断なく二、三十年の久しきに渉わたつても、男子の健康に障害を来すような事がないものか否かを質問し、その返答を伝えてくれたことがあつた。山人は誠に畸人であつて、わたくしの方からは是非にいつて頼むことは一向してくれないが、頼みもしない事を、時々心配して世話をやく妙な癖があつた。或日わたくしに向つて、何やら仔細しさいらしく、真実子供がないのかと

質問するので、わたくしは、出来るはずがないから確にないと答えると、「それはあなたの方で一人でそう思つていられるのじやないですか。あなた自身も知らないというような落おとし胤だねがあつて、世に生存していたらおかしなものですな。」と言う。

「むかしの小説や芝居なら知らないこと、そんな事はあり得ないはなしだ。」とわたくしは重ねて否定したが、しかし人生には意表に出る事件がないとも限らぬから、わたくしは帚葉山人が言つた謎のような言葉を、そのまま茲こゝに識しるして置くのである。

繁殖を欲しなければ繁殖の行為をなさざるに若くはない。女子を近づけなければ子供のできる心配はない。女子を近づけながら、しかも繁殖を欲しないのは天理に反そむいている。わたくしはかつて婦女を後こうどう堂たくわに蓄たくわえていたころ、絶えずこの事を考えていた。今日にあつても、たまたま蘭らんとう燈の影暗きところに身を置くような時には、やはりこの事を考える。

繁殖を望まずしてその行為をなすは男子の弱点である。無用の徒事である。悪事である。しかし世に徒事の多きは啻ただにこの事のみではない。酒を買つて酔を催すのも徒事である。酔うて人を罵るに至つては悪事である。烟草を喫するのもまた徒事。書を購あがなつて読まざるもまた徒事である。読んで後記憶せざればこれもまた

徒事にひとしい。しかしながら為政者のなす所を見るに、酒と烟草には税を課してこれを人に買わせている。法律は無益の行動を禁じていない。繁殖を目的とせざる繁殖の行為には徴税がない。人生徒事の多きが中に、避妊と読書との二事は、飲酒と喫烟とに比して頗廉価である。避妊は宛ら選挙権の放棄と同じようなもので、法律はこれを個人の意志に任せている。

選挙にはむずかしい規定がある。一たびこれに触れると、たちまゐ忽縲いせつはずかしめの辱を受けねばならない。触らぬ神に祟なき諺のある事を思さわえば、選挙権はこれを棄てるに若くはない。

女子を近づけ繁殖の行為をなさんとするに当っては、生れ出づべき子供の将来について考慮を費さなければならぬ。子供が成長して後、その身を過ち盗賊となれば世に害を貽す^{のこ}。子供が将来何者になるかは未知の事に属する。これを憂慮すれば子供はつくらぬに若く^しはない。

わたくしは既に中年のころから子供のない事を一生涯の幸福と信じていたが、老後に及んでますますこの感を深くしつつある。これは戯語でもなく諷刺でもない。窃^{ひそか}に思うにわたくしの父と母とはわたくしを産んだことを後悔^{こうかい}しておられたであろう。後悔しなければならぬはずである。わたくしの如き子がいなかった

なら、父母の晩年はなお一層幸福であつたのであろう。

父と母とは自分たちのつくつたものが、望むようなものに成らなければ、これを憎むと共に、また自分たちの薫陶くんとうの力の足りなかつたことを悲しむであらう。猫が犬よりも人に愛せられないのは、犬のように柔順でないからである。わたくしの父はわたくしが文学を修めたことについて、いかに痛嘆しておられたかは、その手紙の外には書いたものが残っていないので、今これを詳つまびらかにすることができない。しかし平へいぜい生せい儒学を奉じておられた事から推量しても、わたくしが年少のころに作つた『夢の女』のような小説をよんで、喜ばれるはずがない事は明あきらである。

父は二十余年のむかしに世を去られた。そして、わたくしは今

やまさきに父が逝ゆかれた時の年齢に達せむとしている。わたくしはこの時に当つて、わたくしの身に猫のような陰忍な児このないことを思えば、父の生涯に比して遥に多幸であると思えない。もしもわたくしに児があつて、それが検事となり警官となつて、人の罪をあばいて世に名を揚げるような事があつたとしたら、わたくしはどんな心持になるであらう。わたくしは老後に児孫じそんのない事を以て、しみじみつくづく多幸であると思わなければならぬ。

○

文学者を嫌うのも、検事を憎むのも、それは各人の嗜しせい性に因よる。

父の好むところのものは必しも兎のよろこぶものではない。嗜性は情に基くもので理を以て論ずべきではない。父と子と、二人の趣味が相異なるに至るのは運命の戯たわむれで、人の力の及びがたきものである。

大正十二年の秋東京の半なかばを灰にした震災の惨状と、また昭和以降の世態人情とは、わたくしのような東京に生れたものの心に、しやくし釈氏のいわゆる諸行無常の感を抱かせるに力のあつた事は決して僅少ではない。わたくしは人間の世の未来については何事をも考えたくない。考えることはできない。考える事は徒勞であるよ
うな気がしている。わたくしは老後の余生を偷ぬすむについては、唯世の風潮に従って、その日その日を送りすごして行けばよい。雷

同じ謳歌して行くより外には安全なる処世の道はないように考えられている。この場合わが身一つの外に、さんがい三界の首くびかせ柳というものないことは、誠にこの上もない幸福だと思わなければならぬ。



わたくしの身にとって妻帯の生活の適しない理由は、二、三にとど留まらない。今その最も甚しきものを挙げれば、配偶者の趣味性行よりもむしろ配偶者の父母兄妹との交際についてである。いんせ姻戚きの家に冠婚葬祭の事ある場合、これに参与するくらいの事は

浮世の義理と心得て、わたくしもその煩累はんるいを忍ぶであらうが、然らざる場合の交際は、大抵いと厭うべきものばかりである。

行きたくない劇場に誘さそい出されて、看みたくない演劇を看たり、

行きたくない別荘に招待せられて、食べたくない料理をたべさせ

られた挙句あげく、これに対して謝意を陳のべて退出するに至つては、苦

痛の上の苦痛である。今の世を見るに、世人は飲食物を初めとし

て学術文芸に至るまで、各人個有の趣味と見解とを持っているこ

とを認めない。十人十色といろの諺のあることは知っているらしいが、

各自の趣味と見識とはその場合場合に臨んでは、忍んでこれを棄

てべきものと思つているらしい。さして深甚の苦痛を感ぜず

に捨てることができるものと思つているらしい。飲めない酒もそうい

う場合には忍んで快く飲むのが、免まぬれがたき人間の義務となして
 いるらしい。ここにおいてか、結婚は社交の苦痛を忍び得る人に
 して初めてこれを為し得るのである。社交を厭うものは妻帯をし
 ないに越したことはない。わたくしは今日まで、幸にしておのれ
 の好まざる俳優の演技を見ず、おのれの好まざる飲食物を口にせ
 ずしてすんだ。知人の婚礼にも葬式にも行かないので、齒の浮く
 ような祝辞や弔ちようじ辞を傾聴する苦痛を知らない。雅叙園がじよえんに行つ
 たこともなければ洋楽入の長なが唄うたを耳にしたこともない。これは
 偏ひとえに鰥居かんきよの賜たまだといわなければならぬ。

森鷗外先生が『礼儀小言』に死して墓をつくらなかつた学者のことが説かれている。今わたくしがこれに倣ならつて、死後に葬式も墓ぼけつ碣けつもいらなと言つたなら、生前自ら誇つて学者となしていたと、誤解せられるかも知れない。それ故わたくしは先哲の異例に倣うとは言わない。唯死んでも葬式と墓とは無用だと言つておこ
う。

自動車の使用が盛になつてから、今日では旧式の棺かん桶おけもなく、またこれを運ぶ駕籠かごもなくなつた。そして絵巻物に見る牛車ぎつしゃと祭礼の神輿みこしとに似ている新形のきゆうしや枢車しゆしゃになつた。わたくしは趣味の上から、いやにぴかぴかひかっている今日の枢車を甚しくにく悪

んでいる。外見ばかりを安物で飾っている現代の建築物や、人^{じんけ}
 絹^んの美服などとその趣を同じくしているが故である。わたくし
 はまた紙でつくった花環^{はなわ}に銀紙の糸を下げたり、張子^{はりこ}の鳩をとま
 せたりしているのを見るごとに、わたくしは死んでもあんな無^ぶ
 細工^{さいく}なもの欲しくないと思つている。白い鳩は^{キリストきよう}基督教の信
 徒には意義があるかも知れないが、然らざるものの葬儀にこれを
 贈るのは何のためであろう。

元来わたくしの身には^{じゆんぼう}遵奉すべき^{しゅうし}宗旨がなかつた。西洋
 人をして言わしめたら、無神論者とか、リーブル・パンサウル
 とか称するものであろう。毎年十二月になると東京の町々には耶^ヤ
 蘇^ソ降^{こう}誕^{たん}祭^{さい}の贈物を売る商品の広告が目につく。基督教の洗礼を

だに受けたことのないものが、この贈物を購あがない、その宗旨の何たるかを問わずして、これを人に贈る。これが今の世の習慣である。宗教を軽視し、信仰を侮辱することもまた甚しいと言わなければならない。

わたくしは齟齬ちようしんのころ、その時代の習慣によつて、夙はや既に『大学』の素読そどくを教えられた。成人の後は儒者の文と詩とを誦しようすることをたの娯しみとなした。されば日常の道德も不知不識しらずしらずの間に儒教に依よつて指導せられることが少くない。

儒教は政治と道德とを説とどまくに止つて、人間死後のことには言及んでいない。儒教はそれ故宗教の域に到達していないものかも知れない。しかしこの問題については、わたくしは確乎とした考を

持つていない。今日に至るまでこれを思考することができなかつたとすれば、おそら恐くは死に至るまで、わたくしは依然としてごか呉下の旧阿蒙きゆうあもうたるに過ぎぬであろう。

わたくしは思想と感情とにおいても、ふたつ両ながら江戸時代の学者と民衆とのつくつた伝統に安んじて、この一生を終る人である。

一たび伝統の外に出たいと願つたこともあつたが、中途にしてその不可能であることを知つた。わたくしをして過去の感化を一掃することの不可能たるをさと悟らしめたものは、学理ではなくして、風土氣候の力と過去の芸術との二ツであつた。この経験については既に小説『冷笑』と『父の恩』との中に細叙してあるから、ここに贅ぜいせない。

毎年冬も十二月になつてから、青々と晴れわたる空の色と、燈火のような黄いろい夕日の影とを見ると、わたくしは西洋の詩文には見ることを得ない特種の感情をおぼえる。クリスマス夜の空に明月を仰ぎ、雪の降る庭に紅梅の花を見、水仙の花の香をかぐ時には、何よりも先に宗達そうたつや光琳こうりんの筆致と色彩とを想起す。秋冬の交ことう、深夜夢の中に疎雨斑々はんぱんとして窓を撲うつ音を聞き、忽こつぜん然目ぜんをさまして燈火の消えた部屋の中を見廻す時の心持は、木でつくつた日本の家に住んで初て知られる風土固有の寂寥せきりようと恐怖の思である。孟宗竹もうそうちくの生茂おいしげつた藪の奥に晩秋ゆうひの夕陽の烈しくさし込み、小鳥の声の何やら物急ものせわしく聞きなされる薄暮の心持は、何に譬たとえよう。

深夜天井裏を鼠の走り廻るおそろしい物音に驚かされ、立って窓の戸を明けると、外は昼のような月夜で、庭の上には樹の影が濃くかさなり、あたり一面見渡すかぎり虫が鳴きしきっている。

これらの光景とその時の情趣とは、ピエール・ロッチがその著『お菊さん』の中に委くわしく記述している。雨の小息こやみもなく降りしきる響を、狭苦しい人力車の幌ほろの中に聞きすましながら、咫尺しせきを弁わぜぬ暗夜の道を行く時の情懷を述べた一章も、また『お菊さん』の書中最も誦しょうすべきものであろう。

わたくしは今日でも折々ロッチの文をよむ。そして読むごとに、わたくしが日本の風土気候について感ずる所ことごとは悉くロッチの書中に記載せられている事を知るのである。ロッチが初て日本に來遊

したのは、それが日光山の記に、上野停車場を発した汽車が宇都宮までしか達していない事が記されているので、明治十六、七年のころであつたらしい。当時ロツチの見た日本の風景と生活にして今は既に湮滅いんめつして跡を留めざるものも少くはない。ロツチの著作はわたくしが幼年のころに見覚えた過去の時代の懐なつかしき記念である。長煙管ながギセルで灰吹はいふきの筒を叩く音、団扇うちわで蚊を追う響、木の橋をわたる下駄の音、これらの物音はわれわれが子供の時日々耳にきき馴れたもので、そして今は永遠に返り来ることなく、日本の国土からは消去つてしまったものである。

英国人サー・アーノルドの漫遊記、また英国公使フレザー夫人の著書の如きは、共に明治廿二、三年のころの日本の面影うかがを窺わ

しめる。

わたくしはラフカチオ・ハーンが『怪談』の中に、赤坂紀の国坂の暗夜のさま、また市ヶ谷こぶでら瘤寺の墓場にやぶか藪蚊の多かつた事を記した短篇のあることを忘れない。それらはいずれも東京のむかしを思起させるからである。



わたくしはつらつら過去の生涯を回顧して見ると、この六十年の間、わたくしの思想と生活との方向を指導し来きたったものは、支那人と西洋人との思想であつた。支那の思想は老荘と仏教とを混

和した宋以後のものである。西洋の思想は十九世紀のロマンチズムとそれ以後の個人主義的芸術至上主義とである。わたくしの生涯には独特固有の跡を印するに足るべきものは、何一つありはしなかつた。

日本の歴史は少年のころよりわたくしに対しては隠棲といい、退たいえい嬰えいと称するが如き消極的処世の道を教えた。源平時代の史しじよ

乗うと伝奇とは平氏の運命の美なること落花の如くなることを知

らしめた。『太平記』の繙ほんどく讀よみは藤原藤房ふじわらのふじふさの生涯せいげについて景けい

仰いこうの念を起させたに過ぎない。わたくしはそもそもかくの如き

觀念をいずこから学び得たのであろうか。その由よつて来るところを尋ねる時、少年のころ親しく見聞した社会一般の情勢を回顧し

なければならぬ。即ち明治十年から二十二、三年に至る間の世のありさまである。この時代にあつて、社会の上層に立つていたものは官吏である。官吏の中その勲功を誇つていたものは薩長の士族である。薩長の士族に随従することを屑いさぎよしとしなかつたものは、悉く失意の淵に沈んだ。失意の人々の中には董狐とうこの筆を振つて縲るい紲せつの辱はずかしめに会うものもあり、また淵明えんめいの態度を学んで、東籬とうりに菊を見る道を求めたものもあつた。わたくしが人より教えられざるに、夙はやく学生のころから『歸去来ききよらいの賦ふ』を誦し、また『楚辞』をよまむことを冀こいねがつたのは、明治時代の裏面を流れてい

た或思潮の為すところであらう。栗本鋤雲くりもとじょうんが、

門巷蕭条夜色悲
もんこう 門巷は蕭条しょうじょうとして夜やしよく色悲しく

鴿 声在月前枝

鴿きゆうりゆうの声は月こえ前げつぜんの枝えだに在りあ

誰憐孤帳寒檠下

誰あわれか憐こちようまん孤帳かんけいの寒檠もとの下に

白髮遺臣読楚辞

白はくはつ髮いしんの遺臣そじの楚辞よを讀めるを」

といった絶句の如きは今なお牢記ろうきして忘れぬものである。

○

歐洲の乱が平定しフランス仏蘭西の国土がドイツじん独逸人の侵略からわずか僅に免れ得た時、わたくしは年まさにきようし強仕に達しようとしていた。それより今日に至るまでかつきゆう葛かえ裘かえをかえ変ること二十たびである。この間にわたくしは西洋に移り住もうと思立って、一たびは旅行免状を

も受取り、汽船会社へも乗込の申込までしたことがあった。その頃は歐洲行の乗客が多いために三カ月位前から船室を取る申込をして置かねばならなかったのだ。わたくしは果してよくケ―ベル先生やハーン先生のように一生涯他郷に住み晏^{あんじよ}如としてその国の土になることができるであろうか。途中で帰りたくなりはしまいか。瀕死の境に至つておめおめ帰りたくなるような事が起るくらいならば、移住を思立つにも及ぶまい。どうか我慢して余生を東京の町の路地裏に送つた方がよいであろう。さまざま思悩んだ果^{はて}は、去るとも留^{とどま}るとも、いずれとも決心することができず、遂に今日に至つた。洋行も口にはいいやすいが、いざこれを実行する段になると、多年住みふるした家屋の仕末^{しまつ}をはじめ、日々手

に触れた家具や、嗜読しじくの書をも売払わなければならぬ。それらの事は友人にでも託すればよいという人もあろうが、一生還かえつて来ないつもりで出掛けるのに迷惑と面倒とを人にかけるのは心やましいわけである。出発の間際に起る繁雑な事情とその予想がいつも実行を妨げてしまうのであった。人間も渡鳥のように、時節が来るや否や、わけもなく旧巢ふるすを捨てて飛去ることができたなら、いかに幸であつたらう。

昭和十二年丁丑四月稿

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

※「漢詩文の訓読は蜂屋邦夫氏を煩わした。」旨の記載が、底本の編集付記にあります。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年5月28日作成

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

西瓜

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>